

聖書：ピリピ 4：4～7

説教題：思い煩わないで

日時：2017年4月30日（朝拝）

ピリピ人への手紙は「喜びの手紙」と言われています。そのテーマ聖句がこの4章4節であると一般には言われます。「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」2回繰り返して「喜びなさい」と言われています。そしてこれとセットで私たちにチャレンジを与える事實は、パウロがこの手紙をローマの獄中から書いたことです。牢屋の中で恨みつらみを述べて嘆いているのならまだしも、彼はそこで喜びに生きています。しかも牢の中の人が牢の外にいる人たちに向かって「いつも喜んでいなさい」と言う。そのことを覚える時、この言葉は一層のインパクトを持って私たちに迫って来ます。

そしてこの命令がここでは他の二つの命令と一緒に述べられています。一つは5節の「あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。」そしてもう一つが6～7節の「何も思い煩わないで、云々」。原文にはこれら三つの命令を関係づける言葉は記されていません。しかしだからと言ってこれらはバラバラの命令の寄せ集めということではないでしょう。やはりこれら三つには相互に関連があると思われまます。そのことを考えながら、以下の命令を見て行きたいと思います。

まず一つ目は4節の「いつも主にあって喜びなさい。」パウロは「いつも」と言います。すなわち喜びはクリスチャンを特徴づけるべきものである。なぜクリスチャンはいつも喜ぶことができるのでしょうか。そのカギは「主にあって」ということにあります。私たちはもともと罪人であり、神に敵対していた者たちとして、神の祝福から遠く離れた状態にありました。それゆえ様々な苦しみや悲しみをこの世で刈り取って当然の者たちでした。そしてその結末として最終的な神のさばきを受けなければならない者たちでした。しかし神は私たちにイエス・キリストを与えてくださり、その方の十字架を通して、信じる者たちの罪を赦してくださいました。その結果、私たちは最後のさばきの日に罰されることなく、永遠のいのちを持つ者となりました。これは私たちにとって何よりも素晴らしい祝福です。私たちはこの救いを主にあっていただいて喜んでいきます。

しかし主にある救いは将来にだけあるものではありません。私たちはこの地上でなお

様々な苦しみを経験します。信者であることとそうでないこととに違いはあるのかと思われるような毎日を過ごします。しかしそういう中でも私たちは「主にある」と言われています。すなわち私たちのために死んでよみがえり、私たちの罪の負債を全部支払って私たちを神の祝福の中に包んでくださるキリストとの交わりに生かされています。そのキリストにある者として、何とこの世で起こることは全部、私たちの益になると聖書で言われています。私たちの身に起こることで神の前で無駄になることは一つもない。一切のことが相働いて私の救いにつながるように、神はキリストにあって取り計らい、導いてくださっている。ローマ書 8 章 38～39 節：「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」

このような祝福の中に置かれながらも、私たちはしばしば喜びを失なった状態で生活しやすい者です。それは「キリストにある」というこの完璧な救いの状態から目を離して、周りの状況を人間的な目でばかり見ているからではないでしょうか。せっかくキリストにある者とされているのに、色々なことがキリストとの間に割り込むことを許してしまい、キリストが私の視界から消えてしまっている。ほとんど見えない状態になっている。そうしてまるで信仰を持っていない人と同じように生活しているからではないでしょうか。

パウロはそんな私たちに、いつも「主にあって」喜びなさいと言っています。主にあって私たちの幸いは確定しています。その方による救いに今ここで私たちはあずかっていますし、それは最後の日に現れる永遠の救いにつながっています。その主をしっかり見つめる時、そして主が私たちのためにしてくださったことに基づいて毎日の生活に起こることを信仰の目で見つめ直す時、私たちは確かにいつも喜ぶことができるのです。パウロのように牢屋の中に置かれても喜ぶということができるのです。

二つ目は 5 節の「あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。」 さてこの命令は 4 節とどういう関係にあるのでしょうか。これは 4 節の命令を補足し、それをさらに発展させるものと言えます。4 節を見る時、いつも喜ぶためにはイエス様との交わり、イエス様への信仰が必要なのだなと思います。そして私たちはそれを内面的なこと、心の内側のこととだけとらえてしまうかもしれません。しかしこの 5 節の言葉を読むこ

とによって、4節で見た主にある喜びは外側に現れ出るものでなくてはならないことを教えられるのです。逆から言えば5節のように人々の間で寛容な心を示す者となってこそ、私たちは4節で見た真の喜びを持つ者であると言えるのです。

さて「寛容」とは何でしょうか。まず反対に寛容でない人を見ると分かりやすいと思います。寛容でない人とは他の人の失敗を厳しく非難する人、自分になされた悪に対して激しく仕返しをする人、またすぐに腹を立てる人、競争心をあらわにする人、強情な人などをあげることができるでしょう。その反対に寛容な人とは穏やかな人、赦す心を持っている人、忍耐深い人、思いやりのある人などでしょう（新共同訳：「広い心」）。私たちがもし前の節で見た救いの喜びを持っていないと、この広い心を持つことはできません。むしろ自分で自分の救いを勝ち取らなくては！と考え、他の人に厳しくなります。もしそんな中、誰かが自分に迷惑をかけたり、害を及ぼしたりすれば、すぐさま激怒し、報復するでしょう。しかし反対に心に喜びがあるなら他の人に対して寛容になることができます。人の悪に対して必要以上に厳しくならない。自分も主に赦された者です。また主への信頼から来る不思議な心の余裕を持つことができます。自分の幸いについては主にお委ねして、自分としては主が喜ぶように、他の人の益に心を配り、思いやりのある優しい態度を取ることができます。ここで注目すべきは「寛容になりなさい」とは言われていないことです。「あなたがたの寛容な心をすべての人に知らせなさい。」つまりクリスチャンはこの心をすでにいただいているということです。主を知っているとは、こういう心を持たされているということである。その生き方を人々の前で示して良い証しを立てるようと言われているのです。様々な状況で寛容な姿を示すことによって、クリスチャンは何か違うな～、なぜあのようにいられるのだろうかと思っようように生きなさいと。

パウロはこのための励ましを5節後半につけています。「主は近いのです。」この意味としては二つの可能性が考えられます。一つは場所的な意味で近いということ。すなわち主は私たちのすぐそばにおられ、そこに臨在され、私たちを支えてくださる。そのことを覚えて他人に優しくするということです。もう一つは時間的な意味で近い。すなわち主の再臨が近いということです。いつその日が来てもおかしくないという意味でその日は近い(3章20節)。主はいつでも来られること、そしてその日に良くやった！と主に評価されることを楽しみにして、私たちの寛容な心をすべての人に知らせる歩みに励むということです。

最後三つ目の命令が6節から語られます。「何も思い煩わないで、云々」。私たちは何とすぐに思い煩いやすい者でしょうか。気がつくとき常に思い煩ってばかり。そのために喜びはかき消され、どこかに飛んで行ってしまっている。この「思い煩い」あるいは「心配」に良いことが何も無いことは、イエス様が山上の説教で言われた通りです。「あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか」と。むしろ心身のエネルギーをすり減らし、寿命を短くするだけでしょう。ではどうしたらいいのでしょうか。その秘訣は「祈り」だと言われています。6節には「祈り」「願い」「願い事」と三つの違う言葉が重ねられて、祈りの大切さが強調されています。そして祈りを通して「あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい」と言われています。これはもちろん祈るまで神はそのことを知らないという意味ではありません。神はすべてをご存知です。しかしここで大事なことは、祈りを通して私たちの方が「このことを確かに神に知っていただいた」と知ることです。私たちは祈るまでは、自分でどうしようかと色々考えて思い煩っています。ああでもない、こうでもない。こうなったらどうしよう、ああなったらどうしようと心が心配で一杯になっている。しかし神に祈る時、私たちはそのことを「神に知っていただいた」と知るので、神のみもとに自分の重荷を下ろすのです。そして自分の知恵と力によらず、神の最善の知恵と力にお委ねし、お任せすることができるのです。

この祈りにおいて大事なこととして、「感謝をもってささげる祈りと願い」と言われています。私たちは経験済みのことと思いますが、祈りが大事だと知って一生懸命、何かを祈っても、それだけではあまり意味のある祈りができたとは思えないものです。ただ独り言を言っただけのような気がする。それは確かにそうなのです。それは神を見上げないで自分の願いを一方的にべらべらしゃべっただけのようなものだからです。もし神を正しく見ているなら、まず感謝が私たちの祈りの多くを占めてこそ本当でしょう。神は私たちを愛して御子を送ってくださいました。その方の十字架によって私たちの罪を赦し、義と認め、ご自身の子として受け入れてくださいました。そして聖霊を与えて天の御国に入るまで私たちの歩みを確実に守ってくださいました。これまでの歩みを振り返る時、その神の守りと真実を人生の色々な場面で覚えることができます。このような神への感謝をささげる時、私たちは祈りを正しい位置に位置付け、真に神と交わる祈りをささげることができるのです。

そういう祈りには素晴らしい約束がつけられています。7節：「そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」 「神の平安」とは何でしょうか。これは神ご自身が持っている平安という意味でしょう。神ご自身の内に満ち満ちている平安。私たちはイエス・キリストを信じて「神との平和」を持てるだけではありません。その神との平和を土台として、何と「神の平安」を持つことができると言われている。これは神がご自分の内に本質的に持つておられる平安です。世が与えることのできる平安とは違います。何物にも脅かされない偉大な平安。それが私たちを包み、支配するのです。従ってこれは「人のすべての考えにまさるもの」と言われています。私たちは祈る前には色々考えます。こうしたらうまく行くのではないか。ああすれば解決に至るのではないか。しかし祈りを通して経験するのは神から来る圧倒的な平安です。それは祈る前には考えても見なかったような平安。体験して初めて分かる信じられないような平安。まさにこの世のものではない、神から来る平安、神の平安です。これに包まれる時、私たちは「もう大丈夫！」と思うのです。ここで目の前の問題が解決するとは言われていません。問題はそこになおあり続けるかもしれません。しかし圧倒的な神の平安が私たちの心と思いを守ってくれる。何かあるとすぐ慌てふためき、おろおろし、コントロールできなくなる私たちの心と思いをしっかりガードし、動じないように強めてくださる。そして神に任せ切った心、静かな心、絶対的な守りを確信する心をもって事にあたり、それを乗り越えて行くことができるようにされるのです。

私たちはこの祝福を知っているのでしょうか。感謝とともに祈るなら、このような祝福が与えられると頭で理解するだけでは不十分です。この祝福にあずかるには実際に祈らなければなりません。そしてその祈りの中で神に知っていただくという経験をする。その時に私たちは人のすべての考えに勝る神の平安に包まれて歩む幸せを体験するのです。日々、様々な状況に囲まれ、翻弄され、喜びを失いやすい私たち。そんな私たちは思い煩いによって毎日をやり過ごすのではなく、祈りへ向かう者でありたいと思います。あらゆる場合に感謝をもってささげる祈りと願いによって神のみもとにすべての私の問題と重荷とを下ろさせていただく。そのことを神に知っていただく。そこから人のすべての考えにはるかに勝る神の平安をいただいて喜びに満ちて救いの道を歩ませていただく者へ、また私たちの寛容な心をすべての人々に知らせ、このように私を生かしてくださる神の恵みを証しし、御名に栄光を帰す歩みへ進みたいと思います。